

地域との連携

地域のもつ教育資源を積極的に活用し学校教育に役立てようという、学校と地域との連携。

学校の資源や技術も還元・開放し地域の役に立ちながら、生徒に自信も与えています。

県や市、企業などの団体や地域住民とかかわりをもちながら

いきいきと教育活動を展開している事例をご紹介します。

取材・文／永井ミカ

生徒が自ら動き、考える
より積極的な連携にシフト

2006年、文部科学省は「小学校・中学校・高等学校 キャリア教育推進の手引」の中で、家庭・地域と連携・協力することの必要性を述べた。「学校外の教育資源を有効に活用し（略）さらには、産業構造や雇用形態、進路をめぐる環境の変化などについて、またキャリアを形成していく方法等について専門的な知識や情報を持っている外部講師から直接学んだりする機会を持つことが大切である」とのことだ。具体的な内容としては、インターンシップや模擬授業・出前授業、職業人による講演会、社会人講師による体験学習、授業公開などが挙げられている。

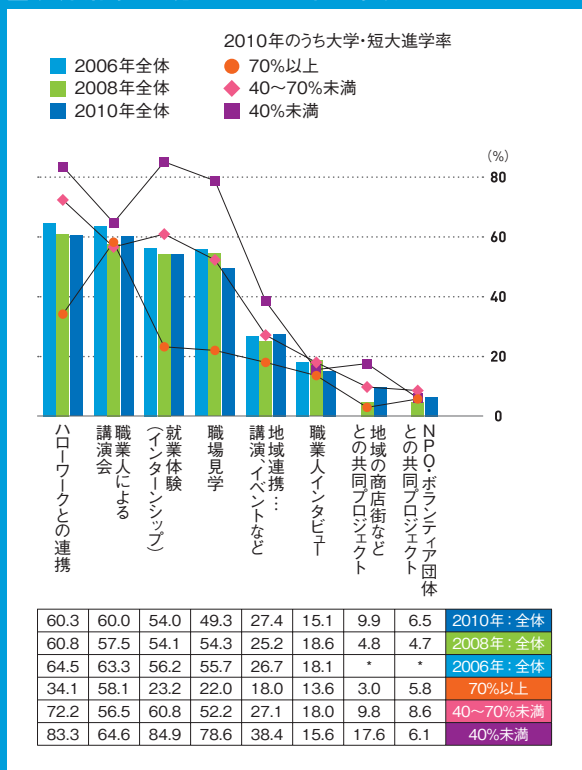
ここで、実施されている地域連携の現状を見ると（グラフ参照）、講演会や職場体験・見学、インタビューなどは減少し、商店街やNPO、ボランティア団体などとの共同プロジェクトが増えている。つまり、見たり聴いたりするだけでなく、生徒自身が動いたり考えたりする、より積極的な連携が増加傾向にあるのだ。積極的な連携（共同プロジェクト）の相手は、商店街やNPO、ボランティア団体のほか、今回紹介する事例では、県や市などの地方自治体や企業などの場合もある。

教員ひとりの取り組みが育ち
連携がさらなる連携を生む

地域連携を行っている学校から共通して聞かえるのは、地域も学校との連携を望んでいるという声。それを受けて自治体でも、教育現場と地域の連携をフォローする動きが出てきた。千葉県は、地域との連携を強化した新しいタイプの学校作りを目指す「地域連携アクティブスクール」事業をスタート。岡山県は、小中学校や高校と地域の連携を促進する「人材バンク」の運営を始めている。

現在主流である講演会や職場見学の
どの地域連携に比べ、共同プロジェクト型

■ 進路指導で実施している取り組み事項



※ 弊社[2006年・2008年・2010年 高校の進路指導・キャリア教育に関する調査]より
(調査対象：全国の全日制高校の進路指導主事)

の連携は実施・継続が難しいという意見もある。内容が本格的・専門的になりがちで、指導できる教員（人）ありきになってしまつたからだ。

しかし、最初はひとりの教員や部活単位で始めた小さな取り組みが大きく育っている例も多数あった。また、ひとつの連携が別の連携を生み連鎖的に広がっていく例や、学校をオープンにし地域の人を巻き入れるだけでも有意義であるという意見もある。

今回はさまざまな連携にフレキシブルに取り組み、地域の学校として認められ、キャリア教育的効果も上がっている事例を紹介する。

地域一丸となって廃校の危機を回避 連携しながら地域を担う人材を育成

— 山形・県立 長井工業高校 —



進路部
清野和敏先生

School Data

機械システム科・電子システム科・環境システム科・福祉情報科
 /1962年創立 生徒数/419人(男子262人、女子157人)
 進路状況(2011年度実績)/大学9.4%、短大3.6%、
 専門学校20.3%、公共職業訓練機関5.8%、就職60.9%
 山形県長井市幸町9-17
 TEL 0238-84-1662
 URL <http://www.nagai-th.ed.jp/>

「長工生よ、地域を
潤す源流となれ！」

市や地元企業と連携しながら、「ものづくり活動」や「ものづくりを通してボランティア活動」を行っている長井工業高校。一時は学校が荒れており、統廃合の危機にあったが、地域の支援で存続できたという経緯がある。1990年代、長井市の地場産業である工業が衰退していった際、この地の製造業界に多くの人材を輩出した同校がなくなるとは地場産業の再生はあり得ないと、長井市や地元企業が連携して、地域の工業高校の重要性を県に訴え、さらに同校の人材育成への協力を申し出たのである。

同校は、地元企業から機械や器具を寄付してもらったり、技能をもった従業員からアドバイスを受けながら、生徒や教員の技術力向上や技能検定の資格取得率向上に力を入れた。また、生徒をロボット相撲などの技術系の大会に積極的に参加させ、学校の存在感をアピール。特にロボット関連では全国的に有名になり、メディアにも多数登場し地元を活気づけた。

そして、資格を取得したりモチベーションの高い優秀な生徒が地元企業に就職するといういい循環が生まれる。「長工生よ、地域を潤す源流となれ！」というスローガンのもと、地域や地元企業と学校の良好な関係は、長年にわたり続いているのである。

課題がはつきり見えるから
そこへ向かって努力できる

現在、同校には地元企業や農家、自治会などから「こんな道具は作れないか」などといったさまざまな依頼が舞い込む。田んぼの除草ロボット「デジガモ」は、同校が開発し長年研究改良を続けているが、もとは地元の有機米栽培グループの依頼で始まったもの。また、地元の鉄道が新駅を設置する際も、待合所作りや周辺緑化による景観形成、駐輪場の設置などを、生徒、教員、PTAが協力しあって行った。隣の施設でボランティアをしながら、高齢者向けツールを開発することもある。これらの多くは、卒業研究にあたる課題研究または各学科の工作部の活動で取り組んでいる。

「ものづくりのテーマを地域とかかわりのもてるものに設定することで、一歩踏み込んだ学習ができます」と言うのは進路部の清野和敏先生。「どんなものが欲しいのか、どう改良してほしいのか、また使い心地はどうかといったことについて、実際の声が聞けるのがメリット。それにより課題がはつきり見え、それをどう解決していくべきかを自分で考え、努力できます」
 できあがったものは、寄付して使ってもらったり、コンテストに出したり、地域イベントなどでお披露目する。最近では、地元企業で生徒が鑄造技術を習い、それを生かして地域のほかの学校の校章を作る活動も始めた。連携が別の連携につながるのももちろん、ほめられたり認められたりすることが、生徒の成長につながっているそう。

地域と連携したプロジェクト

二足歩行ロボットの製作	オリジナルの二足歩行ロボットを製作／部品の設計、製作、組み立てまですべて自分たちでできるよう技術を向上させた。各種コンテストに出場したり、イベントやフォーラムで発表
福祉機器の製作	無線LANを活用した車いすの緊急通報システムの開発／脈拍検出センサーやカメラをとりつけ状態監視用Webページのシステムプログラムを開発。福祉施設でテストを実施
自助具の製作	おとだまの製作／振動すると光ったり音が出たりする「おとだま」を製作。高齢者が音楽を作って楽しんだり、老化防止やリハビリに役立てる。福祉施設でテストを実施
デジガモ・農業支援機械の開発	除草ロボットと大豆の自動選別装置の開発／デジガモは05年より開発し改良を続けている田んぼの除草ロボット。大豆の自動選別装置は視覚センサを使って開発
黒獅子ロボットの製作	黒獅子ロボットの製作／地元の伝統芸能である黒獅子とその祭りをPRするために、ロボットを製作。廃棄処分になるロボットを有効活用

山形県等による「ものづくり産業担い手モデル事業」(2008～10年度)の重点テーマとして取り組み、今年度も継続、または発展させているプロジェクト

生徒と社会人が一緒に受講 公開講座・セミナーでの単位取得も可能

— 神奈川・県立 川崎高校 —



研究グループ グループリーダー
原田利昭先生

School Data

単位制普通科 / 2004年創立
生徒数 / 958人(男子357人、女子601人)
進路状況(2011年度実績、全日制・定時制の合計) / 大学32.3%、
短大10.5%、専門学校24.8%、就職4.8%、その他27.6%
神奈川県川崎市川崎区渡田山王町22-6
TEL 044-344-5821
URL <http://www.kawasaki-h.pen-kanagawa.ed.jp/>

生徒と社会人と教師の 三者が刺激しあう授業

旧川崎高校と旧川崎南高校の統廃合により、2004年に開設された神奈川県立川崎高校。全日制と定時制を一体にした単位制普通科フレキシブルスクールであり、午前、午後、夜間の12時間(90分・6時間授業)の時間割の中から自由に科目選択できるのが特徴だ。

科目には「選択必修修科目」と「選択科目」があり、選択科目はさらに「教養・発展科目」と「系の科目」に分かれる。系の科目の中には、農業「野菜」、生活文化「コミュニケーショントレーニング」、芸術「陶芸」などユニークなものも多い。また、校外の学修や長期休暇中の講座など、さまざまなスタイルで学びながら単位を取得することができる。

同校は県や市と協力して地域の学習センターとしての役割も担っており、校内で生徒以外が学べる取り組みを2種類用意している(表参照)。「公開講座・セミナー」は夏休みや土曜日を使い、同校の教員によって1単位相当の講座を開講するもの。社会人はもちろん生徒も一緒に受講して単位取得ができる。これは、他校の生徒も受講可能だ。もうひとつは「社会人聴講生制度」。社会人受け入れ用の特別な科目や時間があるわけではなく、年間または半年を通じて普通の授業を高校生と一緒に受けられる制度で、昨年度は11科目19人が利用した。

生徒と社会人が一緒に学ぶ事例と受講者数(2011年度)

● 公開講座・セミナー開講講座

No.	講座名	受講者	社会人	生徒
1	やきもの入門	15人	14人	1人
2	手話入門	10人	4人	6人
3	入門点字講座	2人	0人	2人
合計		27人	18人	9人

● 社会人聴講生

No.	講座名	人数
1	書道I	2人
2	実用書道	3人
3	韓国朝鮮語	2人
4	ポルトガル語	2人
5	スペイン語	1人
6	国際理解・国際交流	1人
7	陶芸	3人
8	日本語学	2人
9	物理I	1人
10	日本史B	1人
11	世界史B	1人
合計		19人



公開講座・セミナーは校内で行われる。陶芸用の窯など設備も整っており社会人から好評

地域の豊富な人材を 選択科目で活用

自らの日本史の授業にも社会人聴講生が参加しているという、研究グループリーダーの原田利昭先生は言う。「若い時に学ぶ機会を十分に活用できなかった年輩の方などが多く、みなさん勉強熱心です。休まない、遅刻しない、受け答えも申し分なし。そういう方が授業にひとりでも参加するのは生徒にいい影響を与えていると思います。授業に刺激や緊張感が生まれ、教員も身が引き締まります」

逆に、社会人が教えてくれる授業もある。地域の農家の方が講師となる「野菜」

や、プロが直接手ほどきしてくれる「マンガ表現」「演劇」、地域の養護学校・看護短大の教師やスタッフが講師となる「社会福祉実習入門」などの授業は非常に実践的だ。さらに、上級学校との連携により、生徒が大学や専門学校での通常の授業に通って単位取得できる制度もある。

今後の課題は「大学受験を目指す生徒も含め、もともと多くの生徒が地域と連携したさまざまな学びを体験すること」と原田先生。「生徒にとって多くの人に接し多くの価値観に触れることは貴重な体験。興味のある授業や講座・セミナーにどんどん参加して、進路選択の幅を広げてほしいと思います」

「まちづくり」事業へ積極参加 運営に携わることで学びの効果を高める

— 愛知・県立 豊田東高校 —



総合学科推進部 主任
小瀧逸子先生

School Data

総合学科／1924年創立
生徒数／718人(男子96人、女子622人)
進路状況(2011年度実績)／大学33%、短大12%、
専門学校30(内看護専門11)%、就職21%、その他4%
愛知県豊田市御立町11-1
TEL 0565-80-1177
URL <http://www.toyotahigashi-h.aichi-c.ed.jp/>

イベント企画や運営で 社会参画スキルを身につける

2007年度より、現在の場所に移転し女子のみの普通科から男女共学の総合学科として新たなスタートをきった豊田東高校。人文科学、自然科学、国際コミュニケーション、生活科学、福祉・情報ビジネス、芸術文化の7つの系列に分かれ、さらに12の科目選択プランが用意されている。

改編当時から地域連携に力を入れてきたならば、「コミュニケーション能力や企画力、社会参画のスキルを身につけるとともに地域社会に貢献できる生徒を育てること。同校の地域連携プロジェクトはイベント関連が多いが(表参照)、企画から関わりスタッフとして運営に参加させてもらうのが特徴だ。「企画書作りから始め、計画的に物事を進めることを体験し、その大切さを学ばせたい」と総合学科推進部主任の小瀧逸子先生は言う。



地元商店街による地域活性化事業「ふれ愛フェスタ」に参加。JRC部の生徒が地域の子どもと手作りゲームで交流

地域と学校、双方からの提案で 連携プロジェクトが活性化

今では同校は、地域活性化事業に参画する一員として地域に認められた存在。地域からの要望に応じて、プランや部活動単位で参加したり、各クラスの広報委員を通して全校からボランティアの参加者を募る。一方で、「産業社会と人間」の授業で、市のまちづくりに携わる担当者に講師を依頼するなど、地域の人にもキャリア教育への協力を仰いでいる。

連携は人脈を作り、新たな連携事例に発展する。例えば、最初はビジネス研究部の生徒が裏方的にイベントに参加していたものが、「調理・栄養プラン」の生徒が地元食材を使った商品を開発したり、合唱

地域連携の具体例(2011年度)

豊田でらこや 5月事業 ～今日から君も プロカメラマン～	次世代育成団体「豊田でらこや事業」と協働して、写真科学部が企画立案から関わり地域の小学生対象に写真教室を開催
ふれ愛フェスタ	地元商店街の地域活性化事業にプランや部活で参加。親子連れ向けのゲームや、やきそば・ホットドッグなどを販売
チーム八日市 (10・12・1月)	地元商店街の地域活性化事業に多くの生徒がボランティアとして参加。合唱部によるミニコンサートやフリーマーケットを開催
バナー製作	「美術プラン」や美術部の生徒が1人1店を担当して、各店舗のバナー(宣伝用の旗)を製作。イベントで披露し各店頭飾った
着物 トートバッグ 作り	「ふれあい教室」の一環として、「服飾プラン」の生徒が講師となり、地域の人たちに寄付された着物をトートバッグにリメイク
ハイブリッド フェスタ	豊田スタジアムで行われるイベントに多くの生徒が参加。「調理・栄養プラン」の生徒は地元米を使った「米～ぶ(クレープ)」を販売。「服飾プラン」の生徒はファッションショーを開催。また、1年生20人が「産業社会と人間」の中で作成した「豊田のまちづくり案」を発表

部や吹奏楽部の生徒がコンサートを開いたりということに発展する。また、「美術プラン」や美術部の生徒が商店街の各店舗のバナー作りをしたことが評判になり、地域の警察署から交通安全の旗の製作オファーがあった。これは今年度の実現が決定している。今後は、国土交通省と豊田市が進める地元の川を利用した子ども遊び場作りのプロジェクトについて、環境や理科の学習とリンクさせながらかわっていきたい考えだ。「地域連携は本校が取り組む持続発展教育(ESD)の大事な柱です」と小瀧先生は言う。

これらの活動は広報紙「夢風」で紹介し、地域の中学3年生の全クラスに配布。地域連携に参加したいという意欲の高い生徒の入学にもつながっている。